

ISSN 1341-9676

イギリス ロマン派研究

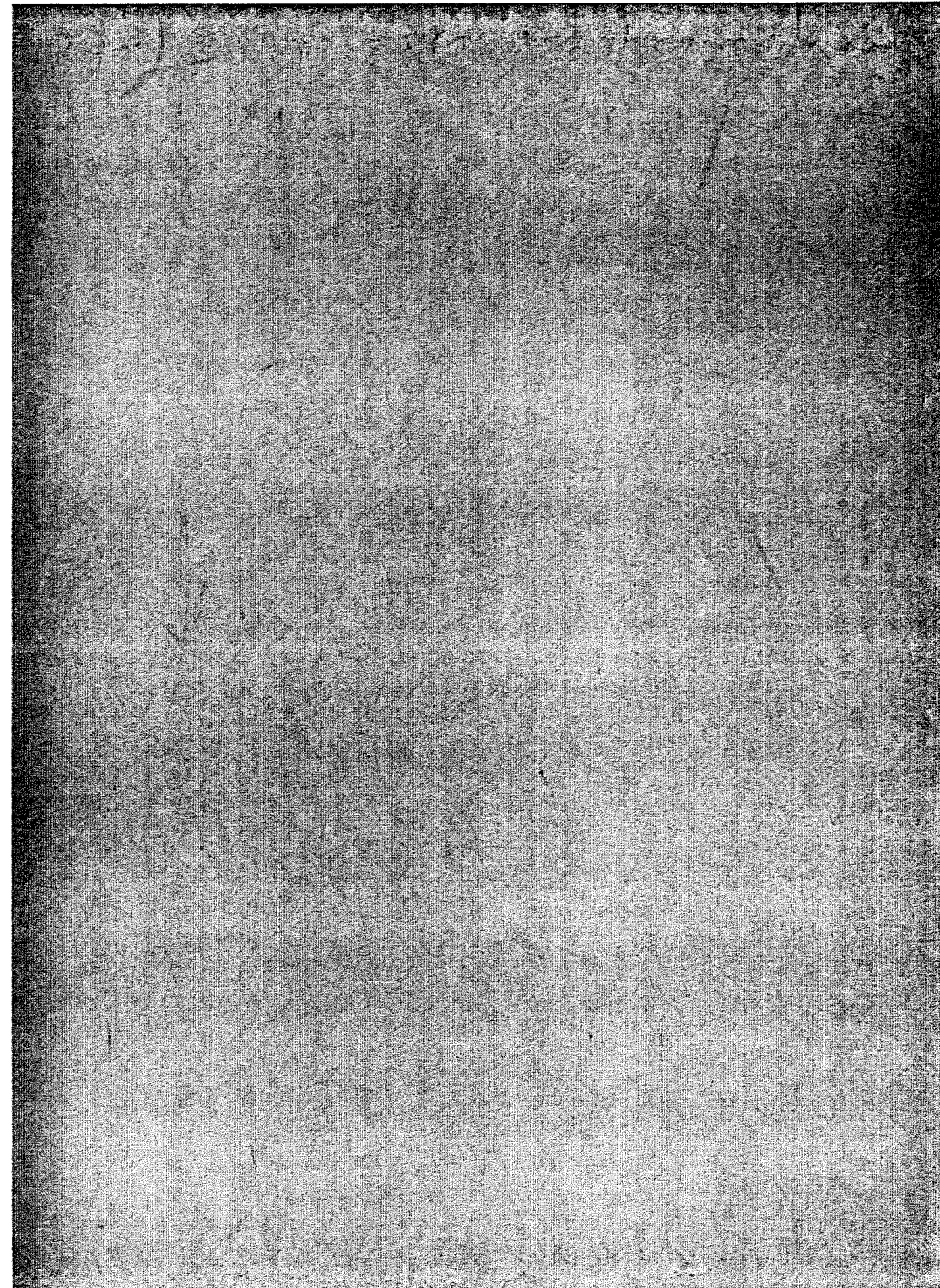
Essays in English Romanticism

第十九・二十合併号

イギリス・ロマン派学会

Japan Association of English Romanticism

1996



「創立二十周年記念シンポジウム——ロマン主義と人間形成」	岡地嶺	1
イギリス・ロマン主義と人間形成	松島正一	11
児童文学と教育——イギリス・ロマン主義時代における	野中涼	21
ロマン派の「子供」と「大人」		

論文

ウーストンの声と家父長制社会	佐藤光	31
——ブレイクの『アルビオンの娘たちの幻想』の一考察		
意味はどこから来るのか	青山恵子	41
——ブレイクの『ユリゼン』第二の書』における意味生成のプロセス		
ブレイクにおける流体力イメージ	遠藤徹	49
——十八世紀科学思想とブレイク		
『抒情民謡集』の編纂——初版から第二版第一巻へ	小林英美	59
ワーズワスとケンブリッジ——『序曲』の第二巻をめぐる	山内正一	67
ワーズワスの都市幻影	岩崎豊太郎	77
『文学評伝』創造の原点——「失意」と「自己認識」	山田豊	85
コルリッジと「二重触覚」	石倉和佳	93
シェリーの理想郷——白色光に至る過程	新名ますみ	101
キーツとゴシック	松崎慎也	111
メアリ・シェリーの「プロセルピナ」——その独創性と本来性	阿部美春	121
「第二十一回大会シンポジウム——キーツを読んだ詩人たちを読む」	水之江有一、西前美巳、及川和夫、渡辺福實、戸田基、園井英秀	131

英語論文

Blake's <i>Vala/The Four Zoas</i> : The Genesis of Night I as a Prelude	WADA Ayako	5
The Problems of Editing the Coleridge Notebooks	MIYAMOTO Nahoko	11
Paradox and Radical Pessimism in <i>Frankenstein</i>	Larry Lee HANSON	27

書評

伊木 和子著 『キーツの世界』	高橋雄四郎	137
野中 涼著 『歩く文化 座る文化——比較文学論』	川口絃明	140
神尾 美津雄著 『他者の登場——イギリス・ゴシック小説の周辺』	山田尚仁	144
鈴木 雅之著 『幻想の詩学——ウィリアム・ブレイク研究』	谷口茂	149
宮川 清司著 『自然と詩心の運動——ワーズワスとテイラン・トマス』	林 瑛二	152
東中 稜代訳 バイロン『チャイルド・ハロルドの巡礼——物語詩』	笠原順路	154
吉野 昌昭編 『ワーズワスと「序曲」』	小林英美	159
森 一 著 『ワーズワスの研究——その女性像』	小柳康子	161
松浦 暢著 『水の妖精の系譜——文学と絵画をめぐる異界の文化史』	薬師川虹一	164
吉田 正憲著 『ワーズワスの「湖水案内」』	大友義勝	167
松島 正一編著 『イギリス・ロマン主義事典』	山内正一	170
佐藤 猛郎訳 スコット『マーマイオン』	深澤俊	173
原孝一郎著 『幻想の誕生——イメージと詩の創造』	小黒和子	175
G・E・ベントレー、青山 恵子編 『本邦ブレイク書誌(Blake Studies in Japan)』	川崎則子	178
第十五回イギリス・ロマン派講座(東京)プログラム		30
編集後記		181
本誌投稿規定		182
英文目次		2

見て、執拗にこの種の詩を取り上げる。『マイクル』における土地と自然」と題する第六章は最晩年になって物(土地)への執着を脱し、この「静謐」にたどり着いた老農夫マイクルの愛のドラマの時代考証を踏まえた分析であり、第七章の「老人詩『決意と独立』」は「孤独と困窮という老年の不幸からおのずから超脱」して、力強く生きる老人に人間の究極の「静謐」(決意と独立)を見いだすに至る、ワーズワスの精神的発展過程を精査した論文である。ところで、かの「幻想の光」喪失の兆しを、著者は第四章の「テインターン・アベイ」の構造「論の中でこの詩の第四連中程の否定語の頻出に巧みに捉えている。その意味で、第四章はこの詩がワーズワスの自然哲学開陳の手引きとされる一般的傾向に待ったをかけた好論文に思われたが、残念ながら最後の段階で裏切られる感は否めない。著者は、この詩の美質が単純な詩的ヴィジョンの開陳にでなく、それへの模索過程の叙述にあると名言を吐きながら、「せいぜいその住処を列挙しただけ」と訝り、その限りで、「少なくとも定義し得た、との確信を得たのであろう」と言うのでは、どう見ても論理に一貫性が認められない。ここでは、詩人が依然としてヴィジョンの住処を外的のみ捉えて、満足した事になってしまい、「ワーズワス＝自然詩人」という通俗なレッテルを払拭したことにならない。この詩はヴィジョン確保の為に、直感への依存に終始するのではなく、より深遠なる自己の内的あり方即ち、キーツの言う(存在論的)「暗い通路」への第一歩を記したものである、と言う形で本論を締めくくべきだったのではなからうか。(大阪大学出版会、一九九四年九月、A5判、三

バイロン作
東中稜代訳

『チャイルド・ハロルドの巡礼』

笠原 順路

このところバイロン研究が急に活気を呈してきた感がある。Jarome J. McGannの校訂によるバイロン全集が一九九三年に完結したことや、小川和夫氏による『ドン・ジュアン』の邦訳が読売文学賞を受けたことは周知のとおりだが、『チャイルド・ハロルドの巡礼』に関しても田吹長彦氏による詳細な註解が一九九二年より刊行されていて、既に第三巻・第一巻が公にされている。さて、こうしたなかでのこの度の『チャイルド・ハロルドの巡礼』の刊行である。

無論、本誌の読者にバイロンの『チャイルド・ハロルドの巡礼』の説明は不要である。また日本におけるバイロン研究の第一人者の、訳者東中稜代氏の紹介をする必要もないはずだ。ただ一応、同氏がこれまでに訳出・出版されたバイロンの作品を

列挙しておく。

- 『バイロン初期の諷刺詩』 山口書店、一九八三年。(『イングランドの詩人たちとスコットランドの批評家たち』、「ホラティウスの指針」を収録)
- 『審判の夢他一篇』 山口書店、一九八四年。(表題作品のほか「ベボウ」を収録)

さて、これまでわが国で出版された『チャイルド・ハロルドの巡礼』の註釈、邦訳は次の三点である。(出版年等の書誌情報には本評のものが正しい。)

- 岡倉由三郎(註) *Childe Harold's Pilgrimage* (研究社、一九二二年)
- 土井晩翠(訳)『チャイルド・ハロウドの巡禮』(一)松堂書店・金港堂書店、一九二四年)
- 岡本成蹊他(訳)『バイロン全集』全五巻(那須書房、一九三六年)。第二巻『叙事詩世界歴史篇』(「チャイルド・ハロルド世界歴史」第一巻)岡本成蹊(訳)、第四巻(小林史郎(訳)を収録)、第三巻『叙事詩世界歴史篇』(「チャイルド・ハロルド世界歴史」第二巻)岡本成蹊(訳)、第三巻(岡本成蹊(訳)を収録)。

評

書

いずれも半世紀以上も前の古典的名著で、このうち岡倉由三郎の註は、評者も常に座右に置きたいへん重宝している。晩翠訳

とはいえ、これを通勤電車の中で読んで一人ほくそ笑むことができればと思うのだが、いかんせん評者の言語感覚では、理解することはできても楽しむことは不可能である。文法構造が分からなくなった時に参考にする程度である。東中氏も「あとがき」にこう述べている——もし平成の時代にこの『チャイルド・ハロルド』の訳の存在理由があるとすれば、それは晩翠の訳が出てから経過した七十年という歳月であろうか、と。評者としてもこの訳者の言をそのまま認めた。

も付しておく。

Foiled, bleeding, breathless, furious to the last,

Full in the centre stands the bull at bay,

Mid wounds, and clinging darts, and lances brast,

And foes disabled in the brutal fray:

And now the Matadores around him play,

Shake the red cloak, and poise the ready brand:

Once more through all he burst his thundering way—

Vain rage! the mantle quits the conyge hand,

Wraps his fierce eye—his past—he sinks upon the sand!

(第一巻七十八連)

裏をかかれ、血を流し、喘ぎ、最後まで怒り狂い、牡牛は中央で窮地に立つ、傷つき、矢に突き刺され、折れた槍を身に受け、むごい戦いで無力になった敵の中に。今やマタドルが彼の周りでふざげ、赤いマントを揺すり、短剣を構える。牡牛は今一度響きをたてて突進する、それは空しい怒り！ マントは巧みな手を離れ、瘡猛な目を包む——終わった、彼は砂塵に沈む！

東中稜代訳

規外れて、血流して、息をもつかず、終まで勢、猛く場の中央、牛逆襲の位置にたつ、夥多の負傷、投槍のひびき、手槍のむらがりとあらびに弱る敵の圍を受けて中に立つ、時なり、いまぞ「マタドル」彼のめぐりに働きて、赤き上衣を振りながら用意の刃ふりかざす、再び牛は奔雷の勢をなして馳けいづる、怒は空し、巧なる腕を上衣ははなれ飛び、牛のはげしき目をかくす。——了れり沙上に牛は斃る。

土井晚翠訳

り東中氏の解釈が正しいと思う。しかも、この闘牛挿話のなかでは、崇高な死を死んでゆく牛に対し、人間の愚かさを際立たせる重要な一語である。

七行目の *he burst his thundering way* の晚翠訳「奔雷の勢をなして馳けいづる」は見事だ。漢語の操り方は、やはり晚翠に一日の長がある。その後の岡本訳で一旦は *thunder* の語感が失われたのは残念だが、東中訳で再び「響きをたてて突進する」と甦ったのはうれしい。この地響きから伝わってくる牛の重量感は、物理的なものだけから来るのではない。生命の重みそのものだ。是非とも訳出したい語感である。

スペンサー連では、多くの場合、最終行のアレグザンドリンに中間休止があり、その休止が「終わり」の感じをだすのに効果的に働いていることが多い。原文では、*his past* の後の中間休止は、連の終わりとも、牛の命の終わりとも、さらにこの闘牛挿話の終わり（あと一連続ぐ）とも相俟って、みごとな韻律的效果をもっている。東中訳の「——終わった」は巧い。「構える……突進する……包む」と現在形の動詞を列ねたあとだけに、この過去形は、原文の現在完了とはちがった意味で巧い。

（評者なら「終わった」のあとには句点を使いたいところだ。）一方、晚翠訳の「了れり沙上の」では、十分に休止がとれていないからいがある。これは晚翠の欠点というより、七五調リズムの特徴でいたしかたない。そもそも七五調のリズムは、切れているように切れていない、続いているように続いていないという特徴がある。七字、五字の各句は前後の句と文法的につながっているのが普通であるからだ。だから七字目・五字目に文法

諸所に傷を負ひ、投槍は響き、手槍の迫つて来る中、残忍な格闘にいさ、かひるんだ敵の中に立つてゐる。今こそ周圍にゐる屠牛者が腕を振りふた。彼は赤い外套を打ち振り、用意の刃を抜き出す。牡牛はもう一度勇を鼓して、駆け出す。だが、空しい怒りだ。巧みな腕によつて外套は牛の頭に被せられ、狂暴な眼を覆ひ隠す——これで終りだ——牡牛は砂上に倒れる。

岡本成蹊訳

まず二行目の *at bay* の解釈について。晚翠訳も岡本訳もともに、岡倉註の「*showing fight*「寄らば嚙まんず勢で」」に影響されているかと思える。つまり、三者とも追い詰められた方が追い詰めた方に対して示す反撃の方に力点がおかれているが、ここではむしろ「絶体絶命の状況にまで追い詰められた状態そのもの」を指しているのではないか。「窮地に立つ」という表現自体の評価は別にして、東中氏の解釈が的を射ているように評者には思える。

五行目では、晚翠訳、岡本訳いずれも、ナレータが闘牛士に味方してしまっている。これはよくない。バイロンの作品のナレータはとりわけ重要な役割を果たしている。注意しなくてはいけない。ただ、七十年前のことだ、晚翠も岡本成蹊も翻訳というものにより大きな自由を感じていたのかもしれない。また同じ行の *play* は「働きて」「腕を振ふ」ではなく、やは

上の切れ目をもってきた場合、八行目の晚翠訳「怒は空し、」の例で分かれるとおり、断絶が大きすぎてしまう。バイロンの物語詩に晚翠の七五調はなじみにくいような気がする。いずれにしても「星落秋風五丈原」や「暮鐘」の晚翠と比べると、見劣りがするのは否めない。晚翠訳出版後わずか十二年で世に出た口語体の岡本成蹊訳の存在理由の一つは、ここにあるように思える。

東中氏がどれだけ先行訳を参考にされたか、または意識されたか、評者は知らない。ただ、部分的ではあるがこうして細かく見てみると、やはり過去七十一年以上に作品理解の点では進歩しているといつてよい。

* * *

ところで作者バイロンは、この作品にかなり大部の註 (*Notes*) をほどこしている。それらの註のうちには、単に韻文部分の直接的理解に必要な史的事実を説明したものもあれば、ちょうど貴公子ハロルドが行く先々の風物にふれて感想を吐露するのように、作者バイロンが自分で書いた韻文部分に触発されてさらなる感想を述べているものもある。第二巻七十三連に関する作者自註などは、後のバイロンのギリシアに対する行動と考えあわせると非常に興味ふかく読める。

一体、ロマン派の作品のなかには、いわゆる「註」が「本文」に比して異常に多いものがある。シェリーの『マップ女王』はその典型だ。新しいシェリー全集 *Geoffrey Matthews and Kelvin Everest, eds., The Poems of Shelley, vol. I (Longman,*

1989)では、註もほぼ韻文部分と同じ扱いを受けている。「ほぼ」と言ったのは、活字のポイント数がいわゆる「本文」と違っているからである。「チャイルド・ハロルドの巡礼」の註は『マップ女王』ほど多くないにしても、バイロンのように事あるごとに自分のことを語る傾向にある詩人、つまり英語でいえば *egotistic* な詩人の場合、作者自註を読む楽しみは韻文部分を読む楽しみに決して劣らない。学問的にいっても、前書やエピソードが韻文部分の理解に必要不可欠であるのと同様に、こうした註もやはり韻文部分の理解にはなくてはならないと評者は考える。これは決して東中訳に対する批判のつもりではない。註は本文の理解にとって必要最小限にとどめるべきだというのが訳者の主張であろうことは十分理解できる。

拙稿冒頭で触れたオックスフォード・イングリッシュ・テキストのバイロン全集の編者マッガンは、作者バイロンの註は NOTES にまとめ、編者自身の註は、それとは別に COMMENTARY に収めた。(第四巻の場合、ホプハウスも註の作成に関わっており、編者マッガンはそれをバイロンの註と一緒に NOTES に入れているのだが、この編集方針の是非については議論の余地があるところだろう。) いずれにせよ、マッガンも、ジェフリー・マシューズとケルヴィン・エウレストも、韻文部分、作者自註、その他の文献(訳註を含む)の間にそれぞれ境界線を設けていることは、注意しておくべきだろう。つまり彼らの編集方針の背後には、作品と非作品の境界線が截然としたものではなく、それぞれの状況に応じて、作品の中心となるテキスト(評者の好きなこととはではないが、この場合いたしかた

ない)から徐々に周辺のテキストへ移行するものだという認識があると考えられる。

さらに言えば、註は常に本文に対して隷属的な位置にあるものなのか、という疑問も必然的に生じてくる。『マップ女王』の註は、本文に対して強く独立を主張している。しかし、この議論はもうこのへんで止めておこう。『チャイルド・ハロルドの巡礼』では、中心と周辺の関係はかわっていないし、評者自身、東中訳にかこつけてだいぶ自分の意見を述べてしまった感がある。ただ誤解のないように断っておきたいのだが、評者は、中心となる部分を限りなく拡散させて、極めて遠い距離にあるテキストを歴史的にアレンジし、中心部分の解釈に変更を加えようとしたり、または中心と周辺のテキストを巧みにすり替えて自らの政治的主張をしようとするような批評の方法論を手放しで認めているわけではない。

とまれ、今回の『チャイルド・ハロルドの巡礼』の出版、英文学研究者のみならず、広く日本の読書界全般にとつての慶事である。(修学社、一九九四年九月、A5判、三八五頁、三八八四頁)

(東京大学助教授)

吉野昌昭編

『ワーズワスと「序曲」』

小林 英美

六人の論者が独自の視点から『序曲』の諸相を多面的に探求した論集である。編者も言うように一つの研究会を母胎としているため、相互の論文に影響が散見される。だがそれは作品解釈の根幹における一貫性と論集としての一体性を本書に付与し、個々の考察の内実を深く充足し合う相乗効果を生み出していると言えよう。掲載順序は、詩人と作品を広い視野で扱うものから、テーマが限定される度合いに応じて配されている。以下、逐一紹介していく。

横川雄二氏の『The Prelude —— 記憶の風景と遠近法』は、詩と絵画の風景描写を芸術史的視野から論じている。氏はワーズワスの記憶の風景が遠近法的知覚の崩れたものであることと彼のピクチャレスク批判の原因を論じ、第十三巻のスノードン山における自然描写が彼の理想を具現したものであることを明らかにする。最後にその世界観の先進性を現代科学や絵画の関連から論じているが、ロマン派前後の詩人・画家等をも包括した考察に展開することが期待される。

木村俊幸氏の論文「ワーズワスにおける孤独について」は、ワーズワスの「偉大なる十年」における「孤独」の意義を巧みに究明する。まず不毛な孤独が詩的恩寵を孕むものへ変容する過程を丹念に解明した上で、詩人の孤独者への憧憬に注目し、孤独の撞着融合的存在(「一人妻刈る乙女」等)への精神的接近に、詩の営みがあったと主張する。最後に「偉大なる十年」の終焉の原因は孤独に対する不安にあり、その兆候は一八〇二年春の小品にすでに見いだせると指摘する。

山内正一氏の論文「ワーズワスと『spirit』——『序曲』理解のために」は、深層において一つに収斂される『序曲』の『spirit』の語義が、表層的には四つの意味で用いられている意義を、精緻な例証分析の末に明らかにしている。『spirit』の存在と機能等の側面から「時点」や孤独者の本質を詳論の後、アルプスとスノードン登山での人間、自然、神の描写の類似は『spirit』としての同質性に起因すると主張する。最後に氏は『spirit』と聖霊の関連から、詩人の伝統宗教への傾斜を示唆して結ぶ。本論考は堅実なミクロ的解析がマクロ的理解の構築に連なることを改めて教示してくれる。

初井貞子氏の論文「少年はなぜ死んだか」は、「There was a Boy」の「少年の死」と「教会」の描写の加筆と推敲の意義を、詩人の想像力に対する認識の変化に起因するという観点から探求している。最初にこの「時点」の類話が『二部序曲』に加えられなかった原因が、虚構性の高さにあったことを緻密な読解を通して検証する。次いで「少年の死」が、記憶の中の少年の不滅性への信頼によるもので、詩人の無言の墓参は「時点」

Essays in English Romanticism

Nos. 19-20

March 1996

イギリス・ロマン派学会規約

第一条(名称) 本学会はイギリス・ロマン派学会と称する。
第二条(目的) 本学会の目的はイギリス・ロマン主義文学を研究し、あわせて会員相互の親睦をはかるものとする。
第三条(事業) 本学会は前条の目的を達成するために左の事業を行う。

(1) 研究会・講演会の開催
(2) 機関誌その他の刊行物の発行
(3) 内外各種研究団体との交流
(4) 理事会において適当と認められた事業
第四条(会費) 会員は毎会計年度末までに会費を納入する。会費は役員八千円、会員五千円、賛助会員二万円とする。
第五条(役員) 本学会は役員をおく。

(1) 会長 一名 (2) 副会長 二名
(3) 理事 若干名 (4) 監査 一名
二、役員は総会において選任される。
三、役員の任期は二年とし、重任を妨げない。
四、会長は会務を総括し、本学会を代表する。
五、副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その事務を代行する。

六、理事会は会長が招集する。
七、理事会は会務の企画・運営にあたる。
八、監査は会計を監査する。
九、本学会は理事会の推薦により、名誉会長と名誉会員をおくことができる。
第六条(総会) 総会は本学会の最高の議決機関である。毎年一回会長がこれを招集する。ただし会長は必要に応じて臨時総会を招集することができる。

二、総会の議決は出席会員の過半数とする。
第七条(経費) 本学会の経費は、会員の会費、補助金その他の収入をもってあてる。
二、本学会の会計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終わる。
三、本学会の会計報告は、監査の承認を得たうえで、毎年一回総会において行う。
第八条 本学会の規約の変更は総会の議決を経なければならない。
付則

一、この規約は昭和五十年五月三十一日より実施する。
二、本学会は、海外との連絡交流の場合、便宜上 *The Keats-Shelley Association of Japan* を用いることがある。
付記
本学会の事務所は学習院大学文学部・松島研究室にもうける。

イギリス・ロマン派研究 第十九・二十合併号

一九九六年三月二十日発行 頒布価格 二〇〇〇円

編集・発行 イギリス・ロマン派学会
代表者 上 島 建 吉
製作 桐 原 書店
発行所 イギリス・ロマン派学会

事務局 桐原書店内 千六六
東京都杉並区高円寺南二丁目四十五
電話 〇三三三二八一九五
郵便振替 〇〇二五〇四一〇二四